

蕃椒栽培

此種の皇國に入しは、文祿の比はひ、煙草と共に將來ると云、

〔農業全書菜〕蕃椒

苗を種る事、又地ごしらへの時分も、皆茄子と同じ、苗長じて後移しうゆべし、其實赤きあり、紫色なるあり、黄なるあり、天に向ふあり、地にむかふあり、大あり、小あり、長き短き、丸き角なるあり、其品さまざま、おほし、手入よければ、一本にも多くなる物なり、盆にうへて雅玩をたすく、人家おほき大邑に近き所は、多くつくりて賣べし、其性つよきものなり、つかへたる食氣を消し、氣の滯を散じ、脾胃をくつろげ、魚肉などのあしき氣をけす物なり、

蕃椒利用

〔大和本草附錄〕蕃椒 能ホシ、ヨクカハキタル時、俄ニ末シテ糊ニ和シ、紙或綿布ニヒログ、凡人

身疼痛ノ處ニ貼ベシ、能愈ユ、腹痛ニハ腹ニ貼、頭痛ニハ頭ニ貼、手足痛ニハ其處ニツク、甚效アリ、時氣感冒ニハ、三四ノ椎ノ間ニ貼テ、被ヲアツクキテ汗ヲ出スベシ、又蕃椒青キ時トリ、細ニスリクダキ鹽ヲ加ヘテヲサメ置、諸食ニ少加フ、蕃椒ヲ諸鳥好ンデ食フ、鶏ナド甚好ム、諸鳥ノ藥ナリト云、猫ノ藤ノ天蓼ヲ好ンデ食フガ如シ、

〔一話一言〕蕃椒西瓜の毒を治す

西瓜に食傷したるには、蕃椒を一味きざみて煎じ用ゆれば、即座に瀉して毒を解するよし、徳廟吉宗○徳川の御時、朝鮮の聘使西瓜にあてられたる時、朝鮮の醫これを以て藥を解したるよし、淺草醫師荒川樂記の話也、天明二年八月十日の朝聞之

〔塵塚談上〕蕃椒は齒牙を損ずるの毒ありと思はる、喰ふべからず、人毎にすき好む者多し、是を嗜む事甚き者を見るに、壯歲にして齒も弱く、或は脱モクる類の人多ければ、喰ふべきものにあらず、記して識者の是正を待也、後藤左一郎が蕃椒説あり、新奇にして僻説多し、

蕃椒産地

〔毛吹草三〕山城 稻荷唐菘タウガラシ